

# アフリカの人々と名付け 43

## 生まれ曜日に因む名前

小馬 徹

牧畜民は、個性性をもつ家畜という存在と共に、人間の独自性を家畜を媒介として表現する。その事実が、生まれ順名の使用を抑止するか、あるいはそれから序数詞的発想を排除する大きな要因だと考えられる。前回は、生まれ順名に序数詞の観念が関与する場合としない場合の意味付けの違いを、このように考察した。

ところが、物事には常に例外がある。しかも文化人類学では、文化とは、いわば単一の状況に対する単一でない対応の可能性を意味する。さらに、歴史過程での変化や変容という重大な要因を考慮しなければならない。

### 名付け、生業、文化

一例を挙げよう。リンハートは、西ナイル語系のディンカ人の隣人であるバリ人が子供を必ず生まれ順に従って命名すると指摘し、両民族の間の対比にさりげなく注意を喚起している [Lienhardt, G., "Social and Cultural Implications of Some African Personal Names", *JASO* 59(2), 1988]。ただバリの場合、序数詞の観念がそれに介在するかどうか述べていない。

バリ人は、南スーダンのジュバ地方を流れるナイル川の、暑く乾燥した河谷平原に住む。言語も文化もディンカ人と類縁的である。19世紀にアラブ人が侵略するまではほぼ純然たる牧畜民だったが、その後は農耕の比重が大きく高まった。生業のこの変化が生まれ順名のあり方にどう関わったのか、興味をそそられる。ただ、今のところ、この点に関する研究はなされていない。

### スワヒリの生まれ順名？

前節で示唆したような研究には、長期の参与観察に基づく資料を得、それを慎重に検討する

考察が不可欠である。一方、通文化的にアフリカの名前を扱った類の書物には誤りが多い。

例えば、一見生まれ順名と間違えるものに、スワヒリ語の Mosi, Pili, Tatu, Nne, Tano —— 一番、二番、三（番）、四（番）、五（番）—— という名前がある。スワヒリ語は、東アフリカの海岸部では母語であり、同時に東アフリカ諸国のリンガ・フランカともなっている。実際、先の名前を生まれ順名だと記す書物が多いのだが、そうでない事を後ほど詳述する。

簡便を旨として、Piliだけを例にとってその事情を検討してみよう。二次的な伝聞資料によって書かれた文献に頼って欧米人が編んだ類の本は、1)「二番目に生まれた子供に用いられるスワヒリ語の名前。『二』か『二つ目』を意味するスワヒリ語」[Stewart J., *African Names*, 1994]、2)「第二子 スワヒリ、東アフリカ」[Keith E. B. (ed.), *Names from Africa*, 1972]、などと説明している。

### アフリカ人学者は権威者か？

3)西アフリカ出身で、言語学者・文化史家として或るアメリカの大学のアフリカ＝アフリカ研究学科長を務める人の著書 [Asante, Molefi Kete, *The Book of African Names*, 1991] も、また4)ナイジェリアの学者で政治家でもあるマドブイケの著書も同様に、「第二子」、とのみ説明している [Madubuike, Ihechukwu, *A Handbook of African Names*, 1976]。

さらに、5)スワヒリ語について英語やスワヒリ語で幾冊も著書を出しているアメリカの大学教授が書いたスワヒリの名前に関する本 [Zawawi, Sharifa M., *What's in a Name? Unait-waje? — A Swahili Book of Names*, 1993]

も、無造作に、「二人目」(Pili Second)と記すだけだ。なお著者は、名前から、スワヒリに出自をもつイスラム教徒であると推測される。

## スワヒリの曜日

何故このような結果になったのか、原因は分からないけれども、端的に言えば、以上1)から5)までの解説はどれも正しくない。Mosi、Pili、Tatu、Nne、Tanoというスワヒリの名前は、どれも生まれ順名ではなく、出生の曜日を記念する名前なのである。

スワヒリ文化には7つの曜日からなる週(juma)の観念がある。それは、Jumamosiから始まり、Jumapili、Jumatatu、Jumanne、Jumatano、Alkhamisi、Ijumaaと続く。西欧の曜日とは少しずれ、スワヒリの週は土曜日から始まって金曜日で終わるサイクルを成している。曜日の名はJumamosiからJumatanoまでが、1から5に当たる序数詞をjumaの後に付けた造語となっている。

なお、週の第6日目であるAlkhamisi(木曜日)は、字義通りには第5日を意味している。それは、日曜日を週の最初の日、安息日を週の終わりの日とする古代オリエントの慣行の名残である。そして、安息日であるIjumaaは人々がモスクに集う日なのである。

だから、Mosi、Pili、Tatu、Nne、Tanoという一連の名前には続きがあり、それはAlkhamisiとIjumaaに由来するHamisi、Jumaである。命名される子供の性別は問わない。

ところで、タンザニアの作家Ebrahim N. HusseinにはWakati Ukuta(1971;宮本正興他訳『時の壁』、1977)という戯曲がある。この作品の主要登場人物の内の3人は、誕生曜日に因むPili、Tatu、Jumaという名前を持っている。

因みに、かつて私は、この作家が週の前半の曜日に因む名前を子供の世代に、後半の曜日に因む名前を親の世代に巧く割り振って、世代の差(時の壁)の感覚を示唆する隠し味に使用

しているという分析を試みた[小馬徹「E. N. Hussein: Wakati Ukutaの形式的側面に見られる伝統的特性」、『一橋研究』2(4)、1978]。

## イスラム教の影響

ところで、スワヒリとは海岸の意味だが、その語源はアラビア語である。東アフリカ沿岸では、紀元680年頃、パテ島に最初のアラビア人居住地ができたと言われる。アラビア半島でイスラム教が成立してわずか数十年後の事に過ぎない。その後も陸続と東アフリカの島嶼部に定住したアラビア人とアフリカの人々とが徐々に融合しながら、スワヒリ文化圏を形成した。スワヒリの曜日の観念がアラビアからもたされた事は明らかだ。したがって、誕生曜日を記念する命名もイスラム文化を起源としている。

西アフリカのハウサにも、誕生曜日に因む命名が見られる。「たとえば、火曜日(Talata)に生まれた男児はTatu、女兒にはTalatuという名がつけられ」る[松下周二「西アフリカ・ハウサ族の名づけ」、『月間言語』19(3)、1990]。ハウサのTatuがスワヒリのTatuに対応する事は明らかだ。ここでもイスラム文化が週と曜日の観念、さらには誕生曜日に因む命名法をアフリカ各地に伝えた痕跡を確認する事ができる——東は船によって、西はラクダを船として。

もっとも同じ西アフリカでも、イスラム教や曜日の観念ではなく、誕生曜日に因む命名法ともなると、その受容の仕方は様ではない。フルベでは、男女を問わず、月曜日(アルティネ)・水曜日(アラルバ)などに生まれた子には曜日名を名前として与える。ところが、「日曜日(アレット)、火曜日(タラータ)、木曜日(アルカミサ)は個人名として使われ」ない。火曜日は吉日ではないからだが、日曜日と木曜日が使われない理由は不明だという[小川了『サヘルに暮らす』、1987]。文化は可能性に、歴史は偶然に開かれていて、名前はそれを映している。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)